
絶対的

川瀬時彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対的

【NNコード】

N6112B

【作者名】

川瀬時彦

【あらすじ】

絶対　　その言葉に入々は魅了される。

絶対に消してはいけない消しゴム（前書き）

感想、評価はお構いなく。

絶対に消してはいけない消しゴム

絶対に消さないでください

そう書かれていた。

なんの疑問もなく小包を開けると、中からは消しゴムがひとつあった。

入っていた箱は無地で伝票のみが張られていた。伝票を見てみると差出人の部分は空欄だった。

いつたい誰が……？

それにもこの消しゴム。ケースがついているわけでもなく、ただ黒のインクで直に『絶対に消さないでください』と書いてある。いや、消しゴムは消すためにあるものである。それを唐突に消すなどいわれても。困る。第一、なんの目的で？

そんな疑問を頭の中で考えたところで解明するはずもなく、その消しゴムをリビングのテーブルの上に放り投げ、クローゼットから適当な服を手に取る。

服を着ながら、沸騰したヤカンのお湯をコーヒーメーカーに注ぎ、食パンをトースターに入れる。

二、三分後、ソファードベッドにいる俺をチンツといふ音がパンの焼き上がりを伝える。

片手でトースターから食パンを掴み上げ、コーヒーカップにコーヒーを注ぐ。時間がない朝はいつも食パンとコーヒーである。

急いで朝ご飯を済ませ、玄関に放り投げてあるカバンを拾い上げて靴を履く。

「七時五十分か……」腕時計をちらと見てみる。

時間がない。急ごう。俺は、ドアノブに手をかけた。

しかしその時だ、何かが俺を引きとめた。声や音ではない。気配だ。いや、これは気配と呼べるのか？ 体全体から伝わるこの感じ

……。靴のままでリビングに引き返しテーブルの前まで直行。そこにある、得体の知れない消しゴム。なぜだかそれを俺は手に取り、カバンを開け、ふでばこの中にしまつ。

もう一度玄関に向かう。

鍵を閉めたことを確認して、急いでアパートを後にし最寄の駅へと向かう。いつものように定期を使って電車に乗り込む。

十五分後、いつもの駅で下車し、急いで大学へ向かう。

なんとか一時限目に間に合つた。机に腰を下ろし、カバンからノートとふでばこを取り出す。

講義の内容をノートに取りながら、あの消しゴムをふでばこから出してみる。書かれた警告文以外は、やはりなんの変哲もない消しゴムである。

あの時、なぜ俺はこれを手にとつてしまつたのか？ 今となってみればなんともないがあの時、あの感覚が俺をそうさせた。この消しゴム……。

使ってみよう。

俺はノートにシャープペンシルで適当に文字を書き込んだ。

右手に消しゴムを取つて、手前から紙に押し付けて、こする。

一拍置いてからだつた。

消しゴムが通過した箇所は、光というものを失つたかのように真っ黒に塗り潰された。その黒くなつた箇所は、いくら他の消しゴムで消そうとしてもいつもこうに光を取り戻さなかつた。

絶対に捨ててはいけないゴミ箱

アパートへの帰り道。俺は例の消しゴムとそれを使用したページを破りとり、川へ投げ捨てた。

ありえない。あれは幻覚に決まっている。

あんなものこの世にあるわけがないじゃないか。気にすることはない。少し疲れているだけだ。家に帰つて十分に体を休めよう。そうすれば良くなるはずだ。

帰宅するなり俺は、ベットに体を深く沈め眠りにつくことにした。

まだ……。

高く上がった日がカーテンから除かせる中、遅い朝ごはんを買いでコンビニに向かおうとした俺を、またもやアレが引き止めた。前回より大きめのダンボール。中を開けると白い無地の物体が。

絶対に捨てないで下さい

その円筒形のいたつて普通のゴミ箱。またもやといつかやつぱりとこのか今回も「絶対に」と注意書きが。

絶対に捨ててはいけない……？ 絶対に……。

「ならば今回はどうなるんだ？」

絶対に起こってはいけないことが起こるのか？
気になる。

俺はテーブルの上に無造作に捨てられている昨晩食べたミカンの皮を手に取った。

もうどんな感情も俺的好奇心を止められなかつた。

ゴミ箱に皮をひょいと投げ入れた。

俺は待ちわびた。どのような事が起ころのか？ どんな不気味な現象が？

しかし、「ゴミ箱は全く反応を示さない。

「……」

やはりだ。昨日のアレは幻覚だつたらしい。まあ、ゴミ箱ならあつても困らない。

テーブルにまだ皮が残つてゐる。捨てておくか。

俺はティッシュに残りを包み、ゴミ箱に投げ入れた。しかし、だ。立つた状態からの視界に写ってきた物。

ゴミ箱のそこにミカンが一つ。

「……」

そこに捨てたはずのミカンの皮はない。昨日食べたはずのあのミカンがそこにあつた。

絶対にあつてはいけないと。

絶対に書き留めてはいけないメモ帳

俺は壊れたラジカセやら、押し入れの奥に収められていた品々を引っ張り出し、ゴミ箱に片っ端から入れた。

一度ゴミ箱から目を離し、次に見たときには破損した部分が完全に直っている。

こんなに良い物は……無い。今現在世界の何処を探してもあるわけがない。あつたら世界は大変なことになつてているはずだ。人々は物を買うことはめつきり少なくなり、経済は混乱。戦争で兵器は使い放題。俺の乏しい想像力でもあらかたそれくらいのことは予想できる。

この非現実的な物体をこの安定した社会の中でどうすればいいものか

それは簡単だろう、いつかみたいに捨ててしまえばいい。いいはずだが。俺だって人間、こんなにいい物を手放したくはない。

しかし、これがあつては決して世の中に良くないのは決まってるだろう。人間の欲望を具現化するこの物体はとても危険だ。デンジャラスすぎるぜ。

でも待て、考えてみたら……ああ……俺は使つてしまつている。もう何回か自然の摂理に反することをやつてしまつた。ああ……このままでは、なにかをしでかしてしまつ。この物体に心を奪われてしまう。そんな愚かな人間にはなりたくないよ。どつかのマンガかアニメの悪役じゃないか。客観的に嫌だ、イヤだ。それだけは……。それまでに早くこれを何とかしなければ。

「あの、これも」

ゴミ収集車を待ち伏せて、俺はゴミ箱を手渡した。

職員は黙つて手を差し向けていた。俺は彼の手にそれを手渡した。

「ミリ」收集車は去つていった。

もう大丈夫だ。後悔はない。あるわけがない。あつてはいけない。俺は正しいことをしたんだ。なにも悔やむことは……ないはず。俺の生活はこれからも今までのよう平穏に普通に過ぎていくのだ。もう心配することはない。

アパートへの帰り道だった。

そしてだ。帰ってきた俺を待ち受けている物。もう驚きや、恐怖という感情は出でこなかつた。おそらくこうなるだろうとどこか、心の片隅で思つていた。

もう、絶対に手を出さない。だからこれを俺はいまから捨てに行くんだ。捨てに

いや待てよ？　いま捨てたら誰かの手に渡るかもしれない……安全の為にも俺が持つてたほうが、絶対いいはずだ。使わなければ……いいんだ。明日の朝すぐに捨てに行く。そうすればいい。

これがいけなかつた。

合理的な理由を無理やりつけて正当化された思想は、やはり過ちしか生まない。人間は閉じられたものを開こうとする。解らない事を解き明かそうとしてしまう。だから俺も開いてしまつた。

今回は数十枚の紙が一片でのり付けされているメモ帳だつた。一番上の表紙には『絶対に書きとめないでください』と太字のゴシック体で印刷が。もちろん今回も警告文を除けば無印良品コーナーで売つてそうな普通のメモ帳。

しかし　俺は知つている。これは普通のメモ帳なんかじゃない。何か、特別な　何かが起つるはずだ。

俺の思考回路は張り裂けそうになる。まるで事故が起つて6時間待ちの高速道路並みだ。通常ありえない非現実の出来事に関連する事柄でいっぱいだ。

「どうすればどうすればどうすれば」と何回も同じ言葉を呪文のよ

うに永遠と繰り返す。

古来人間はいろいろな過ちを犯したのだ。核爆弾を開発した事、いつだつて起こっている戦争、誰かは「パンがなければお菓子は食べればいい」など言つた。そもそも人間が火を使い始めたこと自体過ちだつたのかもしれない。

しかし、いま俺達はこの地球上に生きている。世界は今も存在している。様々な危機を乗り越えて人間社会は今ここにある。氷河期を乗り越え、伝染病にも打ち勝ち、冷戦も切り抜けた。

そう考えれば、俺の起こす行動が現世に影響を及ぼすなど考えられない。この世の摂理でそうなつてはいるのだ。

『日曜日の午前十時、駅前に高橋と待ち合わせ。CDを持っていく』
いつも書き留めて俺は使い減らせた精神を休めるために眠りにつくことにした。

次の日、朝から晩まで何も起こらなかつた。その次の日も、そのまま次の日もだ。

どうしてかは解からないが、今、日曜日の朝までは何もおかしいことは起こつていない。

だが、ここからだ。メモに書き残した日時、時間帯。その時何が起ころのか？ それはわからない。しかし、もう俺は迷わない。服を着替え、カバンの中身を確認した。

ない。

無い。高橋に貸すはずだつたCD。確かに一週間前、このカバンに入れたはず。

部屋の中をよく探したがCDは見つからない。

まあ、別にいい。また今度にするわ。高橋もそんなに急かしてはいなかつたしな。

俺は気づいていなかつた。これがこれから起じることの序章なの

だと。

絶対に開けてはいけない缶詰

俺はアパートを後にした。

大通りに出たものの、タクシーは見受けられない。推測するに、今日は休日なので平日と違い客が少ないのだろう。でもって交通量が多いときたら客待ちの場所は駅ぐらいだろう。必要ないときには邪魔なほどいるもんだが、こう急いでいるときに限つていらないものだ。

とにかく俺は第二の移動手段を考えた。しかし、いろいろな計算をしてはみたが結局、もう間に合はしないのだからバスにすることにした。

最寄のバス停から乗り込む。

それにしても今日は空が嫌な感じに曇つていて。雨が降りそうでも無いが、晴れそれでも無い。空を覆いつくすように広がった雲は太陽光を遮断し、バスから見える街はいつもより沈んで見えた。

バスの車内アナウンスが流れる。

あと一つ過ぎれば駅である。ぼーっと外の景色でも眺めながら次の車内アナウンスを持つことにする。

しかし、次の車内アナウンスの内容には「駅」という単語は含まれていなかつた。

俺は一瞬取り乱しそうになつた。

ちょっと待つてくれ。いま流れた停留所名は駅の一つ過ぎた所のもの。俺は居眠りでもしていたのか？いや、確かにさきほどのアナウンスから一つ目だ。と、とにかく、行き過ぎてしまつているのだからすぐに降りなければ。

俺は次の停留所で下車した。

ここからは徒歩である。かなり気分がブルーになるが仕方が無い。それにもしても、なぜ駅を通過しなかつたのだろうか？記憶では

今まで通っていたはず。別に居眠りをしていたわけではないし。外の景色から経緯を推測しようにもぼーっと眺めている状況下では目に入った映像をそのまま横に流してしまっているので思い出せない。

この疑問を打破するには現状を直に目にするほかに方法はないだろう。

駅まで徒歩で5分程度。……もう少しだ。

自分を疑うべきなのだろうか？

今、目に入っている光景　こちらが眞実ならば俺の記憶は嘘だつた、ということか？

俺の記憶　少なくとも三日前まではここに駅という公共施設が建っていたのだ。あの十年ほど前に立てられたであらう、コンクリートが少し黄ばんだ外壁と、それに不釣合いなほど近未来的な内装のあの駅。

しかし、目に入ってくるのは綺麗に整地された空き地ばかり。今まで駅が建っていた場所がぽっかりと無くなり、絶大なる違和感を漂わせていた。

お、落ちつけ、俺。こういうときは落ち着いてから考えるべきだ。人間焦ると良くない。　だから冷静に、……OK。

冷静に、サスペンスドラマに出てくる刑事みたく冷静に状況把握をしよう。

……俺は、駅に向かっていた。そして、バスに乗車。しかし、駅には止まらず一いつ向こうのバス停で降車。そして此処にいたる。

通行人はいつもと同じように素知らぬ顔で通り過ぎている。ということは……。

いや、俺は間違っていない、いないはずだ。俺の精神はいたつて正常であつて若年性痴呆とかでもないし、別に変なクスリを服用したわけでもないし、……だからだからだから、俺はいたつて正常だ。正常だから常識の範囲内で考えるんだ。今日は高橋と

俺はもう一つの疑問点に気づいた。

「高橋は

」

俺は走り出す。彼の家は駅から徒歩3分。そして彼の性格上遅刻などはしないはず。

嫌な予感がした。

雲が急に黒くなりだし、いまにもぽつりぽつりと降り出しそうである。

そして、俺は、彼の家に到着。

家は、ある。あたりまえのことだが、今の俺にとつては重大な事柄である。

ドアの左手に取り付けられたインターホンの呼び鈴を押す、といきたかったが俺は躊躇してしまった。押せば安心できるのだ、中からあいつが「ごめんごめん」と言ひて飛び出してくるはずだ。だから、何も躊躇することは無い。

ボタンに手を伸ばしたかったのだが、その手は震えていて狙いが定まらず、一度目の挑戦によってそのボタンは押された。

さあ、出て来い！ 出て来い高橋！ いつものよくなすつとぼけたセリフを吐いてくれ！ 今回は別に怒らないから。だから

「どちらまで？」

そのインター「ポン」しの声は彼の母親であった。俺は問う。

「あの、高橋君の友達なんですが

「主人はいま出勤していますが」

「いえ、息子さんのほうです」

「息子？あの……、人違いだと思います」

「……彼を……」

「いえ、我が家には

体の向きを反転させて走り出す。

ああ、もういい。

わかつた、認める。

つまりとにかくこの世に彼は存在しないのだ。

「どうするどうするどうすれば」

なんて自問自答しては見たのだが答えは返つてこない。

しだいに足に力がはいらなくなり、フラフラとした足取りで俺が
たどり着いた場所は先ほどの空き地、または元駅。

空からは雨が激しい勢いで降り出し人の姿は見えなくなり。

そして、その空き地の真ん中に光る金属製の物体を見た。

絶対に開けないでください

その缶詰らしき形の物体には白のラベルにそう書かれていた。

絶対的

頭を地面に埋めようが、拳を地に叩きつけようが、声にもならぬ鳴咽を出そうが　何をしても目の前にあるのは全てが現実。小降りだった雨は大降りになり、通行人の姿は見えない。ただ一人の男が何もない空間でぽつんと、うなだれているだけ。

ああ、ああ、ああ、俺は、俺は、俺は……何度過ちを踏めば良いのか。

そして訪れたゲームオーバー。それはあまりにも残酷だった。推測すれば分かることだった。しかし、そんなことも分からぬ愚人である俺に訪れた報いとしては妥当なものなのだろう。

後悔とあきらめの感情が交錯する中、俺の目の前にはひとつ缶詰が。そして当然『絶対に開けないでください』との警告文が。

しかし、今回は今までのとは少し違った。今まで、黒で書かれていた警告文は、赤の色に変わっていた。そのドス黒い赤を表現するならば年代物のワイン、または血。そしてこの色は俺の脳によつて「危険」と判断された。これが最終警告らしい。開けるものか、もう一度と開けるものか。この後に及んで、なぜ開けようというのだろうでもよかつた、全てが。俺は激しい自己嫌悪に苛まれていた。いつだつて同じ過ちを犯す自分に、そして不条理な世の中に。あの小包が家に来たところで俺はこうなると決まっていたのか。まあ、途中で絶つ手立てはあつたはずがあの文と、そして誰も言及しない状況、それを踏まえて考えると無理なものなのかもしれない。

俺はとても巧妙な罠に掛かったのだ。「絶対に」　と人の本能に巧みに語りかけ、一切の干渉をせずに自発させる。

誰だよ、こんなもの考えて奴は。俺は恨むぞ、そいつだ、そいつが悪いんだ。俺は被害者である。楽しい大学生活をエンジョイできるはずだったのだ。しかしそれはあの悪夢のような（本当は現実の）郵便物等によつてぶち壊されてしまった。

なぜ、俺なのだ。俺でなければならなかつたのか？ よりによつてどうして俺を選んだのか。日本の中だけでも約十三億人いるといふのになぜ俺だつたのか。どうして他の奴には届かなかつたのか？ なんて不条理なんだ。俺以外全ての奴のせいなのだ。俺のせいではない悪いのは世界全てである。だから俺はこの世に復讐するのである。仇討ちをするのだ。

そして俺はすばらしい方法を思いついた。

この缶詰を開けるのだ。

メモ帳でさえ駅校舎、人間そしてそれらに関する一切を排除できたのだ。今までから推移すればそれ以上の惨劇が予想される。おそらく、開けた途端に爆発、水素爆弾並、いやそれ以上の破壊力を持ち、地球を破滅へと追い込むだろう。

俺の人生を奪つたからにはそれぐらい意図も問わない。これで俺と一緒に三途の川を渡つてもらおう。それが制裁だ。もう俺は引き戻せないとこままで来てしまつた、いつそのことだ。

さあ、世界が終わるまで後十秒。カウントは始まつている。

左手で缶詰を引き寄せて、上部につけられたプルトップを爪で起こす。

これを思いつき引き抜いたとき今まで以上の何かが起ころ。それは人類を破滅へと追い込みかねないようなことではないかと推測される。

右手の人差し指をリングにかける。

これで終わりだ。

そこで俺は目を覚ました。

全てを飲み込むようなあの出来事は本当に悪夢だつたのだ。

カーテンから差し込む朝日が壁の時計のガラスを輝かせ時刻ははつきり読み取れない。

少しばかり立ち上がり時計を見てみる。八時十分。少しばかり遅れはしたが大学には間に合つ。

ベッドを見ると、俺が寝ていたところが人型の形に汗で湿つていった。着ている衣服の襟辺りはゴムがべとべとになっている。おもむろにテレビをつけて気付いた。今日は土曜日。大学には行かない日であった。

俺は実に一日以上あの悪夢を見続けていたのであった。

俺は、いまさらながら恐怖した。あの郵便物ではない。自分があの缶詰を開けそうになつたことだ。世界規模の無理心中をあつさり実行に移そうとしていた。

人間何かに引き付けられるとなにをしてかすか分からぬ。

俺は「絶対的」な何かに魅了されていた。

窓の外にはいつも通りの町並みが並んでいた。

絶対的（後書き）

これは私がちょっとした思い付きで書いたものなので、特に見直しをしません。

最後は夢オチになつてしまつたな。正直、やつてはいけないことですよね。（当初は考えていなかつた）

自分は今になつて思うけどこれは童話調で書いたほうが良かつたのではないかと思う。その方が逆におぞましいような気が……。
そして、アドバイスをくれる方が居るならばありがたい。いや、ぜひぜひ評価してもらいたい。酷評でも構いませんから。
それが肥やしになると想つ。

読んでくれてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6112b/>

絶対的

2010年10月8日15時20分発行